

〔学会〕 第52回 千葉医学会例会 整形外科例会

日 時：昭和47年12月9日（土）・10日（日）

会 場：屋 階 大 講 堂

1. Marfan Syndrome の整形外科的治療

一とくに側彎症を中心として一

○小野 豊, 大木 勲, 大木健資 (千大)

最近 Marfan 症候群の5症例について、整形外科的治療を行なったので報告する。5症例のうち側彎症治療をおこなった4症例につき、治療成績をみると、Harrington 手術をおこなった2症例では、平均矯正率を上まわる矯正率が得られた。1例は halo-pelvic traction を、おこなったが、traction syndrome が出現して十分な traction を行なうことができなかった。1例は Milwaukee brace を装着して治療開始、よい矯正率が得られている。1例は漏斗胸の手術をおこなったがよい結果が得られた。

従来 Marfan syndrome の手術的治療に関しては術後大動脈瘤などが破裂して死亡することもあるといわれるので、aortogram により aneurysma の存在の有無を確認し、さらに本症の先天性結合組織異常という basic defect を十分に把握した上で手術を行なえば、満足する結果が得られるものと考ええる。

2. 慢性関節リウマチの手関節部骨線変化について

○勝呂 徹, 松井宣夫, 大木健資,
陳 義龍, 野平勲一 (千大)

昭和42年1月より昭和47年10月までに千葉大学整形外科および千葉市立病院リウマチクリニックを受診せる手関節に症状のある慢性関節リウマチ患者91例（男性14例, 女性77例, classical RA 82例, definite RA 9例）について手関節部における骨変化について、臨床像ならびに X 線学的変化について検討を加えた。RA test では、87%の陽性率を認め、また Stage の進行例においても grip strength の良い症例もある。さて全身関節と比較すると、腕関節は37.1%とかなりの頻度で発症し、Stage 2~4 は80%と高頻度で骨、軟骨にその変化を認めた。発症年齢については50才台に多く、Stage の進行も比較的速い。すなわち臨床経過と Stage との関係は onset 後6カ月以内は early Stage が多く、

6カ月をすぎると骨、軟骨の病変は進行し1年をすぎると80%は骨、軟骨になんらかの変化をきたし、きわめて進行性である。それゆえ、早期滑膜切除術の提唱されるゆえんである。

3. 骨転移癌の診断と治療法について

○豊田 敦 (千大), 久米通生,
安井璋光, 黒田重史 (君津中央)
高田典彦 (県立ガンセンター)

今回われわれは昭和45年以降3年間に君津中央病院でとりあつた骨転移癌の症例15例と、初診時骨転移癌を思わせた類似疾患3例を加え検討しました。年令はいずれも40才以上であり、男6例、女9例であります。原発巣は肺癌7例、乳癌3例、胃癌2例のほか上顎癌、前立腺癌、腎癌各1例であり転移部別には脊椎が7例と圧倒的に多く、そのほか身体各部に発生しております。多発性転移は11例、孤立性転移は4例でありました。診断には年令、X線所見、RIの応用、needle biopsy などを用いております。治療法としましては、内分泌療法、化学療法、放射線療法、手術療法を単独または併用しておりますが、とくに後者の2つが有効だと考えます。内分泌療法はホルモン依存性癌にのみ使用しております。手術的療法はわれわれはかなり積極的に行なっておりますので、とくに手術症例を中心に代表例をあげ述べさせていただきました。

4. 多発性脊髄腫瘍の一治験例

○中村 勉, 辻 陽雄 (千大)

われわれは13年間の観察期間中、前回第3胸椎、今回第4胸椎、第2、3腰椎合計4個のノイリノームの一治験例を報告し、二、三の検討を行なった。第4胸椎の部は、前回ミエロおよび今回の手術所見より新たな発生と考えた方が妥当であるが、腰部部については、前回のミエログラムで造影剤欠損を思わせる所見および硬膜横径の拡大所見が認められ、明らかにすでに何等かの腫瘍性変化の存在が示唆された。当時の臨床所見なかんず

く, 知覚障害高位が上位胸髄にあるため, しばしばほかの脊髄の変化を看過されることは諸家の報告ごとくである。一般に多発性脊髄腫瘍症例の臨床症状を見ると, そのほとんどが最上位腫瘍によるものが主体をなし, それ以下の腫瘍に起因された症状を隠ぺいする傾向がある。

われわれは非水溶性造影剤による比較的大量ミエログラフィーによって, 臨床症状にとらわれることなく, 全脊柱の検索が最も必要であると考ええる。

5. 先股脱検診における要経過観察例の経時的推移

○金田庸一, 篠原寛休, 尾崎賢太郎, 中村謙介,
藤塚光慶, 大島恒高 (松戸市立)

松戸市立においては, 1971 年 4 月より 3 カ月乳児先股脱検診を実施しており, 1971 年度は総数 3347 例中正常 3180 例, 要経過観察 114 例, 治療 53 例であった。われわれはこの要経群に注目し, 早期に, より適確な診断をつける目的でレ線像の検討を行ない, 臼蓋の型によって 3 つの type に分類し, 予後との関係を求めた。

3 つの type の内, 100% 正常化している I 型, すなわち臼蓋が下に凸なものは要経群よりはらずし, 正常の中に入れる事ができる。II 型すなわち臼蓋嘴のどきが悪いものは, 対向位の具合などレ線の因子の有無, さらに診察所見を加味し, 慎重な経過観察が必要である。III 型すなわち見た目の臼蓋角が急峻なものは II 型よりも治療へ移っていく割合が高いので, レ線所見が種々ありさらに有効な診察所見のあるものは, 早期に治療を開始すべきものと考ええる。これらの治療方針で集団検診時に被検者をチェックすれば, 現在の要経群の幅は 3.4% から約 2% へ落ちつくものと考ええる。

6. 悪性過高熱が疑われた 1 例

○三枝 修, 小野美栄 (千葉労災)
黒岩瑠光 (千大)

13 才女子の脊椎側彎症手術の麻酔に際し, 導入直後熱発, 高血圧をみ, 悪性過高熱を疑い, 表面冷却, そのほか対症療法を行ない救命し得た一例を経験した。

本例は検討の結果 S. C. C. により誘発されたものではないかと考える。後日 NLA と pancuronium bromide で無事手術を完了し, 麻酔経過ならびに術後経過は良好であった。本症例が悪性過高熱であるかどうか疑問な点もあるが, 悪性過高熱の発生を予知できない現在, 諸家の報告例より, 早期発見早期治療が予後を良好にする, 最も重要な点であることを知った。

7. 脊髄症状を初発症状とせる clear cell carcinoma

○堂後昭彦 (千大)

全く尿路疾患を思わせる症状なしに, 脊髄症状を呈し, 手術時, 組織診断にて, 腎癌と判明した症例を経験したので報告した。

症例は 63 才の男性で, 昭和 45 年 5 月ごろ, 両下肢のつれるような感じがし, 昭和 46 年 8 月ごろ, 両上肢の疼痛, 歩行困難, 第 5 胸椎以下の知覚障害が出現し, 10 月, 当科入院した。

腎癌は透明細胞型, 顆粒細胞型, 混合型と分類され, 発生率は全悪性腫瘍の 1 ないし 2% と低い, その骨への転移率は 35.3% と高く, 悪性腫瘍のうちでも予後の悪いものとされている。

この症例は, 肺, 第 1 胸椎, 第 9 胸椎に腎癌の転移がみられ, 第 6 頸椎から第 2 胸椎に椎弓切除術を施行し, 術後 10 カ月で死亡, 剖検し, 第 7 頸椎, 第 1, 8, 9, 10 胸椎に腎癌の転移を認めた。

8. 小児股関節結核の一例

○中川武夫 (千葉市立)

股関節結核は近年激減しており, 千葉市においても, S 43~47 年の 5 年間に 5 例の発生をみたにすぎない。症例, 9 才男子, 左膝関節痛と跛行を主訴に来院した。患者は 3 才ごろより跛行および左股関節痛を発現し, 某医にてギプス固定, 免荷装具などの治療を受けてきた。当時のレ線では左股関節臼蓋, 骨頭, 頸部の骨萎縮, 骨頭変形, 関節裂隙狭小, 骨端線不規則化を示す初期より, 高度の関節破壊を示すまで約 6 カ月にすぎず, きわめて進行の早いことが如実に示されている。来院時すでに, 機能障害著明のため, 化学療法下に, 病巣廓清術および Watson-Jones 法による股関節固定術を行ない, 移植骨は自家骨同種骨を併用した。術後患者は元気に日常生活を送っている。抗結核剤の発達後は, 本例のごとく, 典型的経過を示す小児股関節結核はまれであり, また小児期の股関節固定には, 今後さらに経過観察を必要とする多くの問題があるため, 若干の文献および統計的考察を加えて報告した。

9. 外傷後に起こったと思われる習慣性膝蓋骨脱臼の 2 症例

○船津恵一 (金沢病院)

過去 2 年間に比較的まれな習慣性膝蓋骨脱臼を 2 例経験したので報告する。習慣性膝蓋骨脱臼は純外傷によるものではなく先天素因に加えてなんらかの誘因によって起こると考えられている。われわれの 2 例ともはっきりし